

中国語を母語とする日本語学習者の不同意行為

—ヘッジ使用にみられる中間言語の考察—

堀 田 智 子

要 旨

本研究では、中国語を母語とする日本語学習者、日本語母語話者、中国語母語話者を対象に調査を行い、不同意行為におけるヘッジ表現の語用論的特徴と語用論的転移の可能性を探った。分析の結果、日本語学習者のヘッジは、平均使用数と列挙や推測、可能性、思考に関わる言語形式を多用する点で、日本語母語話者と類似する傾向がみられた。しかし、一部の言語形式（否定疑問など）および「命題の不確かさ」を示すヘッジを優先的に使用する点で、目標言語話者とは異なった。また、言語形式の選択には語用論的転移（正の転移・負の転移）が、機能面では語用論的転移（負の転移）が影響する可能性が示唆された。

【キーワード：日本語学習者 / ヘッジ / 語用論的能力 / 中間言語語用論 / 不同意行為】

1. はじめに

外国語でコミュニケーションを成功させるためには、文法や語彙などの言語能力だけでなく、状況や対人関係などに応じて目標言語（以下、TL）を適切に使用できる語用論的能力も併せて習得する必要がある。第二言語（以下、L2）学習者の語用論的能力に関わる研究分野は中間言語語用論（Interlanguage Pragmatics）と呼ばれ、依頼や断りなど発話行為遂行時にみられる言語使用上の特徴を明らかにするとともに、語用論的逸脱（Pragmatic Divergence）の原因として、語用論的転移（Pragmatic Transfer）、つまり母語（以下、L1）の語用論的知識がL2に与える影響を検証する研究が行われている。

L2日本語学習者を対象とした中間言語語用論研究では、従来、特定の発話行為における談話展開パターンの解明が中心的課題であり、「ヘッジ（迂言的表現）」に関心を向けられることは少なかった。ヘッジは、L2学習者にとって難易度の高い言語現象の一つとされる。様々な言語形式（動詞や終助詞、否定疑問など）で示されるだけでなく、文脈依存性が高く、さらには文化的側面が大きく影響するためである（Fraser, 2010）。特に日本語は、聞き手への配慮を顕示する言語である（岡本, 2006）ことから、ヘッジの適切な使用はL2日本語学習者にとって容易でない。

また、「不同意」行為は、「自分の願望や行為が他人から好ましく思われたいという聞き手の願望に関し、話し手が否定的評価をしていることを示す行為」の一つとされ、回避したり緩和したりすべきものとされる（Brown & Levinson, 1987、田中（監訳）2011）。会話分析のアプローチをとる先行研究では、ヘッジが不同意では発話効力緩和のために有効な言語的ストラテジー

の一つであると報告されている (Pomerantz, 1984; Brown & Levinson, 1987; Rees-Miller, 2000; Holtgraves, 1997; Locher, 2004)。しかしながら、ヘッジがどのような言語形式によって示され、不同意においてどのような機能を担うのか、また、中間言語としての語用論的特徴を詳細に記述した研究は限られており、検証の余地がある。

そこで本研究では、L2日本語学習者が不同意行為で使用するヘッジに注目し、中間言語語用論の観点から考察する。

2. 研究の対象

2.1. 不同意行為

不同意で使用されるストラテジーは、先行発話が「事実」あるいは「意見」かによって著しく異なる (服部, 2004)。本研究では、Rees-Miller (2000) を参考に、不同意行為を以下のように定義する。

聞き手 A が発話した意見、もしくは信じていることが前提とされる命題 P について、話し手 S が述べた P ではない命題内容または含意をもつ一連の発話 (群)

2.2. ヘッジ

ヘッジは、命題内容に対する話し手の態度 (不確かさ) の伝達だけでなく、円滑なコミュニケーションを構築、維持するための有効なストラテジーの一つとされる (Brown & Levinson, 1987; Fraser, 2010)。また、Fraser (2010) では「ヘッジとは修辭的ストラテジーであり、発話者が言語的デバイスを使用し、ある表現の意味的成員性 (命題のヘッジ) あるいは伝えられる発話行為の効力を緩和させる (発話行為のヘッジ)」(Fraser, 2010; 22、堀田・堀江 (2012) 訳) と述べられている。

本研究では、堀田・堀江 (2012) にならい、ヘッジを「円滑な人間関係を確立・維持するための言語手段」、つまり「ポライトネス・ストラテジー」の一つとして位置付け、「不同意行為の発話効力を緩和する言語形式」と定義し、以下の二つの機能をもつものとする。

- A) 可能性や程度性、類似性など命題内容の不確かさを示す機能 (以下、「命題の不確かさ」)
- B) 情報に対する話し手の捉え方 (発話態度) を緩和させたり、感情や思考などの発話内容を緩和させたりする機能 (以下、「発話内容緩和」)

なお本研究では、分析の対象を命題内容に付加される単語レベルの言語形式に限定し、言いさし文や受動態などの統語構造に関わるもの、笑い、ポーズ、動作的ヘッジなどは含まない。またフィラー (例: 「あー」「えっとー」など) はヘッジとして機能することが知られているが、本研究の調査参加者の発話には場つなぎ語のような用法や適切な語彙 (例: 「水源」) が想起できないこ

とによる言い淀みなど、本研究におけるヘッジの定義と一致しない形式が多かった。したがって、フィラーに関しても分析対象外とする。

3. 先行研究と問題の所在

3.1. 不同意行為を緩和させるための言語的手段

先述のように、ヘッジは不同意を緩和させるための言語的手段として有効であることが指摘されている。以下では、日本語母語話者を対象とした梶本（2004）および中国語母語話者を対象とした王・松村（2010）を挙げる。

梶本（2004）は、日本語母語話者の反対意見表明の特徴を分析した。その結果、発話者は①「～気がする」、「～かもしれない」などの推量の形式、②問いかけ、③流暢でない話し方、④相手の意見の一時的容認、⑤笑いによって、対人関係への配慮を示していたと述べている。王・松村（2010）は、中国語母語話者の不同意表明の特徴を分析した結果、①聞き手と親しい関係の場合、明示的に不同意を示す傾向がある、②明示的な不同意表明の際には「吧（でしょう）」などの推量の口調、問いかけ形式での表明、言い淀み、などによって表現を和らげる工夫を行うと報告している。

3.2. L2日本語学習者のヘッジ

日本語の緩和表現を対象とした研究では、主に日本語学や日本語教育の観点から個々の言語形式（終助詞など）に注目した研究が多く行われてきた。L2日本語学習者のヘッジの使用実態を包括的に分析した研究には、Iwasaki（2009）と堀田・堀江（2012）がある。

Iwasaki（2009）は、中級中レベルから上級下レベルのアメリカ人L2日本語学習者のインタビュー・データに基づいた研究である。分析の結果、L2日本語学習者が「思う」を多用するのに対し、TL日本語母語話者は「～じゃないですか」や終助詞「よね」などにより共通基盤（Common Ground）を求めていたと報告している。また、このような差異が生じた原因として、日本語の習熟度が不十分だったこと、L2日本語学習者は意見緩和の必要性を日本人ほど感じていなかった可能性を挙げている。

堀田・堀江（2012）は、中国語と韓国語各々を母語とするL2上級日本語学習者が「断り」行為で使用するヘッジに注目した。分析の結果、学習者はTL話者に比べ、複数の機能をもつ限られた言語形式を多用するが、終助詞の使用は困難だったとしている。また学習者が一部の言語形式を多用していた原因として、教室内での指導の効果と、L1とTL間で形式とその語用論的効力とのマッピングが行われた可能性を指摘し、L1の影響を示唆している。

3.3. 先行研究のまとめと問題提起

これまで述べてきたように、日中両言語の不同意では、推量や問いかけを示す表現が発話効力を緩和することが報告されている。一方、L2日本語学習者のヘッジは、使用頻度や言語形式、機

能の面で TL 母語話者と異なる傾向があり、そこには、習得の難しさだけでなく、語用論的転移、特に L1 と TL 間で意味的に対応する言語形式の有無が影響することも示唆されている。

しかしながら、L2 学習者が不同意行為で使用するヘッジの全体像や言語転移の有無については十分に検証されていない。L2 学習者の言語使用に L1 の語用論的知識が転移される可能性があることは、第二言語習得研究において指摘されており、中間言語語用論においても検証すべき項目の一つである。

4. 研究課題

本研究では、実証的データに基づき、L2 日本語学習者のヘッジの使用実態を包括的に考察する。具体的には、不同意行為をデータとして、使用数、言語形式、機能、の三つの観点から L2 日本語学習者の語用論的特徴の解明を試みる。また L2 日本語学習者の言語使用が TL 話者から逸脱した場合の原因として、語用論的転移の有無を中心に検証する。

5. 研究方法

5.1. 調査参加者

本研究では、日本国内に在住し、同性の親しい友人同士のペア（2 人 1 組）で参加可能な日本語学校、大学、大学院に在籍する学生に、1 回のみ参加という条件で調査協力を依頼した。年齢や性別、会話参加者の人数と親疎関係がヘッジの使用に影響する可能性を最小限にするためである。また学習者には、上級レベル（日本語能力試験の 1 級 / N1 合格者）であることを追加条件とした。収集できたデータは、①日本語母語話者同士のペア（以下、JJ）20 組（男性：8 組、女性：12 組）、②中国人日本語学習者と日本語母語話者のペア（以下、CJ）20 組（男性：7 組、女性：13 組）、③中国語母語話者同士のペア（以下、CC）20 組（男性：13 組、女性：7 組）である。CJ の中国人日本語学習者の平均学習歴は、約 2 年 10 ヶ月、平均滞日期間は約 1 年 1 ヶ月である。CC は全員、滞日期間が 9 ヶ月以内である。

5.2. データの収集方法

データの収集には、タスク・シートに基づく合意形成型ディスカッションを採用した。具体的には、「砂漠で遭難した時」(柳原 2003) を参考に作成したタスク・シート（燃え盛る飛行機の中から取り出すべき 12 個の品物の優先順位を決める）に基づき、会話参加者が互いの意見を聞きながら合意形成を目指すよう指示した。会話時間は 20 分を目安としたが、結論がでたときに自由に終了するように指示した。収録した会話データの平均時間は、CJ が約 23 分、JJ が約 20 分、CC が約 18 分である。

5.3. 分析方法

分析データは、一連のディスカッションにおける不同意行為である。全発話のうち、CJ は中

国人日本語学習者、JJ と CC は一連の会話で最初に不同意を示す話者の発話を分析対象とした。CJ の日本語話者（中国人日本語学習者の対話相手）は、分かりやすさを優先させ、ヘッジの使用を故意に避ける可能性があるため、分析対象から除いた。

次に、日本語は堀田・堀江（2012）を、中国語はRue & Zhang（2008）と彭（2012）を参考にヘッジに相当する言語形式を抽出した後、発話内容とイントネーションを考慮しながら本研究の定義（本稿2.2を参照されたい）に合致するもののみをヘッジとして認定した。例として、助詞「ね」を挙げる。ポライトネスの観点から機能的な分類を行った宇佐美（1999）によれば、（1）はいわゆる同意の「ね」であり「会話を促進する機能」、（2）は話し手が聞き手を自分の話題に引き込むために使用する「注意喚起」、（3）は聞き手の感情や心理に配慮して使用される「発話緩和」、（4）は「発話内容の確認」、（5）は言いよどみやことばを探すフィラーとして使用される「発話埋め合わせ」に分類される。本研究で「ヘッジ」として認定するのは、「発話内容の緩和」を示す（3）および「命題内容の不確かさ」を示す（4）である。

- (1) 飛行機のように、飛行機酔う人ってあんまりいないよね。
- (2) でもねえ、九州もわたしね、長崎は一回行ったんだけど。
- (3) (前略) 全部揃ってくるまで、えーと、そちらにはお渡しできないんですね。
- (4) えーと、それから250も、今日初めてでございますよね。
- (5) えー、にゅ、入稿はですね、2回ぐらいに分けたいとゆうふうに思っております。

(宇佐美1999：249-253)

本研究で認定した主なヘッジは、表1の通りである。

表1. 本研究で認定した主なヘッジ

日本語 ¹	中国語
「～ないか」などの否定疑問文、「～でしょう」などの付加疑問文、「思う」、「気がする」、「～たりする」、「ね」、「とか」、「かな」、「よね」、「かもしれない」、「そうだ」、「ようだ」、「みたいだ」、「ちょっと」、「あまり」、「たぶん」、「もしかしたら」、「けっこう」、「感じ」、「可能性」、「どうか」	「对吧」や「对不对」を用いる諾否疑問文、「是不是」を用いる反復疑問文、「觉得（思う）」、「一点（ちょっと）」、「比较（比較的）」、「左右（ぐらい）」、「啊什么的（とか）」、「吧（でしょう）」、「可能（たぶん）」、「像（みたいな）」、「不一定（～とは限らない）」、「不/没～那么（あまり～ない）」

全てのヘッジは、まず一元配置分散分析を行い、1回の不同意行為あたりの平均使用数をグループ間で比較した。5%水準で有意差がある場合は、多重比較を行った。次に、個々の言語形式が全ヘッジに占める割合について比較した。最後に、全てのヘッジを「命題の不確かさ」と「発話内容緩和」の2種類の機能に分類し、カイ二乗検定により2種類の機能の分布に差があるかを確認した。5%水準で有意差がある場合には多重比較を行った。

6. 結果

調査の結果、JJ は75、CJ は77、CC は83の不同意が抽出できた。本節で示す会話例中、下線部はヘッジを、斜体の言語形式は特に注目すべきヘッジを示す。話者を示すコードの説明は、以下の通りである。1、2文字目のアルファベットはグループ（JJ：日本語母語話者、CJ：中国人日本語学習者、CC：中国語母語話者）、3文字目は性別（F：女性、M：男性）、数字はペアの番号、末尾は話者（J：CJの日本語母語話者、C：CJの中国人日本語学習者、AとB：JJおよびCCの各話者）を示す。

6.1. 1回の不同意あたりの平均使用数

認定したヘッジの合計は、JJが87個、CJが64個、CCが183個である。1回の不同意行為に含まれるヘッジの平均使用数は、CCが2.15 (SD = 2.24) で最も多く、JJが1.16 (SD = 1.37) と続き、CJが0.82 (SD = 1.00) と最も少なかった(表2)。また一元配置分散分析の結果、 $F(2,237) = 14.48$ 、 $p = .00$ と、1%水準で3グループ間において有意差がみられた。そこで多重比較を行ったところ、JJ・CC間とCJ・CC間ではそれぞれ1%水準で有意差がみられたが、JJ・CJ間では有意差がみられなかった。

表2. 1回の不同意行為に含まれるヘッジの平均使用数 (JJ, CJ, CC)

	JJ	CJ	CC
平均使用数	1.16 (1.37)	0.82 (1.00)	2.15 (2.24)

() 内は、標準偏差を示す

6.2. 言語形式

表3に、出現した主な言語形式の一覧を示す。中国語のそれぞれの訳については、表1を参照されたい。上位5位の言語形式に注目すると、JJでは否定疑問「～ないか」と「かな」が14.9%と最も多く、「とか」(13.8%)、「たぶん」と「思う」(8.0%)が続いた。CJでは、「かな」と「とか」、「たぶん」の3種類の言語形式が同数で最も多く(14.1%)、「思う」(12.5%)、「あまり」と「ね」(6.3%)が続いた。CCで最も多かったのは「觉得(思う)」(30.6%)であり、「可能(たぶん/かもしれない)」と「吧(でしょう)」(8.7%)、「什么的啊(とか)」(5.5%)、「比较(比較的)」と「一点(ちょっと)」(4.9%)が続いた。

表3. 各言語形式の数と全体に占める割合 (JJ, CJ, CC)

JJ		CJ		CC	
ないか	13 (14.9)	かな	9 (14.1)	觉得	56 (30.6)
かな	13 (14.9)	とか	9 (14.1)	可能	16 (8.7)
とか	12 (13.8)	たぶん	9 (14.1)	吧	16 (8.7)
たぶん	7 (8.0)	思う	8 (12.5)	什么的啊	10 (5.5)
思う	7 (8.0)	あまり	4 (6.3)	比较	9 (4.9)
でしょう	5 (5.7)	ね	4 (6.3)	一点	9 (4.9)
かもしれない	5 (5.7)	でしょう	3 (4.7)	啊	8 (4.4)
というか	3 (3.4)	みたいだ	3 (4.7)	不一定	7 (3.8)
みたいだ	3 (3.4)	感じ	3 (4.7)	对吧/是吧	7 (3.8)
くらい	2 (2.3)	かもしれない	2 (3.1)	不/没~那么	6 (3.3)
その他	17 (19.5)	その他	10 (15.6)	その他	39 (21.3)
合計	87 (100)	合計	64 (100)	合計	183 (100)

() 内は全体に占める割合 (%) を示す

このようにCJは、JJと同様に、列挙を示す助詞「とか」、疑問を示す終助詞「かな」、可能性を示す副詞「たぶん」、思考に関わる動詞「思う」、を多用していた。CCも、思考（「觉得」）や可能性（「可能」）、推測（「吧」）、列挙（「什么的啊」）を示す言語形式を多用しており、JJ、CJと同様の傾向がみられた。しかしCJは、JJが最も多く使用していた否定疑問「ないか」をほとんど使用していなかった（JJ: 13例、CJ: 2例）。CCにおいても、否定辞を含む疑問文はほとんど観察されなかった。

6.3. 機能

2つの機能（「命題の不確かさ」機能と「発話内容緩和」機能）がヘッジ全体に占める割合をグループ間で比較した結果は、表4の通りである。JJでは、「発話内容緩和」(52.9%)が「命題の不確かさ」(47.1%)に比べやや多かった。それに対してCJは、「命題の不確かさ」(64.1%)が「発話内容緩和」(35.9%)に比べ多かった。CCも、CJと同様に、「命題の不確かさ」の方が多かった。また統計の結果、 $\chi^2(2) = 6.86, p = .03$ と、5%水準で有意差がみられた。そこで多重比較を行った結果、JJとCJ間では5%水準で有意差がみられたのに対して、CJとCC間では確認されなかった。このように、CJのヘッジが示す機能は、CCと同様に「命題の不確かさ」に偏っており、JJの示す機能とは異なることが明らかになった。

表4. 機能別にみるヘッジの数と全体に占める割合 (JJ, CJ, CC)

対象者	「命題の不確かさ」	「発話内容緩和」	合計
JJ	41 (47.1)	46 (52.9)	87 (100)
CJ	41 (64.1)	23 (35.9)	64 (100)
CC	115 (62.8)	68 (37.2)	183 (100)

() 内は全体に占める割合 (%) を示す

「命題の不確かさ」を示すヘッジは、CJとCCで特に多く観察された (JJ: 47.1%, CJ: 64.1%, CC: 62.8%)。CJはJJ、CCと同様に、可能性や列挙を示す言語形式 (JJとCJ: 「たぶん」や「とか」、CC: 「可能 (たぶん/かもしれない)」や「什么的啊 (とか)」) を命題内容に付加させることで、情報の不特定化や可能性の低さを示し、自身の発話内容に対する責任を軽減させることが多かった。

(6) は、CJが「命題の不確かさ」のヘッジを使用する会話例である。二人は、地図とウォッカの優先順位について話し合っている。CJM03Jは、「地図もウォッカも不要だ」と述べている (番号5306)。それに対しCJM03Cは、不同意を述べるにあたり、「たぶん」によって「(地図があれば) 水源が見つけれられる」可能性を、「とか」によって水源以外にも有用な情報が探せる可能性を示唆し (番号5307)、地図が重要であること (不同意) の理由を間接的に述べている。

(6)

話者	発話内容	番号
CJM03J	地図とウォッカは、どっちも要らんなー<笑い>と、思うなー。	5306
CJM03C	でも、はい、え、でも、地図があれば、あの、あの、この辺りを、 <u>たぶん</u> 、1番近い、他の、あの、水源があるところ <u>とか</u> 、航空写真…。	5307

(7) は、CCによる「命題の不確かさ」の使用例である。二人は羅針盤の重要性について話し合っている。羅針盤が最も大切だとするCCF05Bに対し (番号1011)、CCF05Aはそれに直接言及することなく、「他要吃 (食べなければならない)」と不同意の理由を述べ、続けて「水」を羅針盤の代案として挙げている (番号1012)。CCF05Aは、「水」に「啊什么的 (とか)」を後続させ、食に関するものを選ぶべきではないかと、水以外の他にも選択肢がある可能性を示している。

(7)

話者	発話内容	番号
CCF05B	然后…、那样的话，我是按这个想的，所以我就先把指南针给弄出来了。 (そして、そうそう、私そう考えていた。だから羅針盤を一番に選んだ。)	1011
CCF05A	嗯，可是他要吃啊，他… <u>水啊什么的</u> 。 (うん、でも、食べなければならないよ、彼は… <u>水とか</u> 。)	1012

「発話内容緩和」を示すヘッジは、JJで過半数を占めたが、CJとCCでは4割以下だった（JJ: 52.9%, CJ: 35.9%, CC: 37.2%）。3グループ（JJ, CJ, CC）に共通して、思考に関わる動詞（JJとCJ:「思う」、CC:「觉得」）や推測を示す助詞（JJとCJ:「かな」、CC:「吧」）を命題内容に付加させることによって、不同意の意図を不鮮明にし、聞き手との直接的対立を回避していた。

（8）は、CJが「発話内容緩和」のヘッジ「思う」を使用する会話例である。二人は、塩と地図の優先順位について話し合っている。塩が重要だと主張するCJM05Jに対し（番号5669）、CJM05Cは命題「地図（が重要）だ」に「思う」を後接させ発話態度を緩和させながら不同意を述べている（番号5670）。

(8)	話者	発話内容	番号
	CJM05J	塩、重要だと思う。	5669
	CJM05C	俺、やはり地図だ <u>と思う</u> 、じゃ、じゃんけんぽんしよう。	5670

「発話内容緩和」を示すヘッジのうち、CJでほとんど観察されなかったのは、否定疑問「ないか」である。（9）に、JJの使用する否定疑問の例を示す。JJF11Bは、方位磁石が最重要アイテムだとしている（番号4573）。それに対しJJF11Aは、水の重要性（不同意）（番号4574）とその理由（番号4576と番号4578）を示し、さらには塩の必要性についても言及している（番号4578）。一連の不同意において、JJF11Aは「ないか」の後接によって、自身の主張を緩和すると同時に、聞き手JJF11Bの発話（番号4575と番号4577）を引き出し、共通基盤を探っている。

(9)	話者	発話内容	番号
	JJF11B	ここまで逃げる、私さ、ここまで行くために一、方位磁針が1番必要かなと思ったの、なんか南。	4573
	JJF11A	方位磁針よりも一、まず、水じゃ <u>ね?</u> 、へへ<笑い>。	4574
	JJF11B	水?。	4575
	JJF11A	水じゃ <u>ない?</u> 、水なかったらさー、	4576
	JJF11B	死ぬ?。	4577
	JJF11A	死ぬ、で、それとともに、塩なかったら死な <u>ない?</u> 。	4578

以上をまとめると、CJはCCと同様に、ヘッジによって「命題の不確かさ」を示し、情報に対する責任を回避させる発話が多かった。それに対してJJは、「命題の不確かさ」以上に、「発話内容の緩和」つまり、話し手自身の主観的意見の断定を緩和させたり、聞き手の発話を引き出すことによって共通基盤を探しながら、不同意行為を遂行することが多かった。

7. 考察

7.1. 1回の不同意あたりの平均使用数

CJ (L2日本語学習者)の平均使用数は、JJ (TL母語話者)との比較において、有意差が確認されないものの、相対的に少なかった。また、CC (L1母語話者)に比べ、有意に少なかった。したがって使用数に関しては、語用論的転移、つまりL1からL2への影響が生じた可能性は低いということが示唆された。

CJの使用数がJJに比べ限定的だった点は、上級日本語学習者 (L1中国語とL1韓国語)の「断り」行為を考察した堀田・堀江 (2012)においても同様の報告がなされており、言語 (TL/L1)や発話内容を問わず、TLの習熟度が高くても、その使用がL2学習者にとって容易ではないことが伺える。また本研究の調査参加者は、難易度のやや高いテーマ (「砂漠で不時着した場合に何から取り出すか」)について話し合い、合意形成をしながら結論を導き出さなければならなかった。したがってCJは、聞き手への配慮よりも、不同意の伝達を優先せざるを得なかったと考えられる。

7.2. 言語形式

CJは、JJ、CCと同様に、列挙や推測、可能性、思考に関わる言語形式を多用していた。しかしCJは、JJが最も多く使用していた否定疑問をほとんど使用していなかった。CCもCJと同様だった。これらの結果は、CJにとって、ヘッジとしての使用が比較的容易な言語形式 (「かな」、「たぶん」や「とか」、「思う」)と、困難な言語形式 (否定疑問「ないか」)があることを示唆している。

L2日本語学習者による「たぶん」と「思う」の多用は、Iwasaki (2009)、堀田・堀江 (2012)を支持する結果である。したがってこれらの言語形式は、L2日本語学習者がヘッジを習得していく過程で普遍的にみられる中間言語体系の一つと言えるが、それ以上に、語用論的転移 (正の転移)が大きく影響したと考えられる。上述のように、CCは、日本語で意味的な対応がある言語形式 (例:「觉得」、「可能」、「吧」、「什么的啊」)を多用していた。また中国語母語話者が「吧」によって不同意を緩和させることは、王・松村 (2010)においても報告されている。以上のことから、CJは、L1とTLに共通する語用論的特徴に気づき、L2使用時にその知識を転移させた可能性が高い。

一方の否定疑問 (「～ないか」)の過少使用は、語用論的転移 (負の転移)に起因すると思われる。CCは、否定辞を含む疑問文 (「不是～吗」など)を1例も使用していなかった。また家村 (2003)によれば、中国語を母語とする日本語学習者が多様な否定表現を習得するのは、上級レベル以上だという。CJは、全員が上級レベルであることから、否定疑問文の存在を認識しているに違いない。しかし、その産出が容易でないことは、想像に難くない。動詞の活用変化という統語的操作に加え、上昇イントネーションという音韻情報にも注意を払わなければならないためである。言語類型論的に異なる中国語話者は、L1の語用論的知識に頼ることができず、L2で十分に使用できなかったと思われる。機能の側面に関しては、7.3でも詳述する。

このように、言語形式によって産出の難易度が異なることが分かった。またその原因として、語用論的転移（正の転移・負の転移）が影響することが示唆された。

7.3. 機能

二つの機能に大別した結果、JJでは「命題の不確かさ」と「発話内容緩和」が拮抗していたが、CJとCCでは「命題の不確かさ」が「発話内容緩和」に比べ多かった。また、JJとCJ間では有意差がみられたのに対して、CJとCC間では確認されなかった。本結果は、Iwasaki (2009) および堀田・堀江 (2012) を支持する結果であることから、L2日本語学習者の「命題内容の不確かさ」を優先的に使用する傾向は、中間言語形成の段階において普遍的にみられるものと考えられる。しかし、CJの使用するヘッジの機能がJJと異なった背景には、普遍性だけでなく、語用論的転移（負の転移）が影響したと考えられる。

本研究の調査協力者のうち、ディスカッションのテーマ「砂漠で遭難」した経験をもつ者、生き残る術を専門的に学んだ者はいない。つまりテーマに関わる知識や情報量は、グループを問わず、同程度である。それにもかかわらず、CJとCCは、JJ以上に、不同意の理由を述べる際に、情報を不特定化させたり、可能性や真偽に関わる確信度の低さを示し、発話内容に対する責任を回避させたりすることが多かった。これらのことから、「聞き手への配慮」の優先度が日中両言語で異なっており、それらL1の語用論的知識はL2に影響したと考えられる。

「発話内容緩和」を示す言語形式のうち、グループ間でその使用が顕著に異なったのは、否定疑問「～ないか」である。日本語の否定辞を含む疑問文は、自己の明言や断定を避け、表現を和らげる（中島, 1999）ことから、「発話態度の緩和」を示すヘッジの一つと言える。中国語の否定疑問文には、聞き手への配慮が示されないという（大西, 1995）。また井上・黄（1996）では、中国語では否定辞つきの真偽疑問文が使える文脈は極めて限定的であると指摘されている。このように、否定疑問文の機能は、L1とTLで一致しない。CJは、日本語の否定疑問文がもつ語用論的効力に気付かず、ヘッジとして使用できなかった、つまり語用論的転移（負の転移）が生じたことを示唆している。

以上をまとめると、CJは、JJと異なり、「命題内容の不確かさ」を優先させる傾向にあると言える。また、JJの使用の差異が生じた原因には、語用論的転移（負の転移）、「発話内容の緩和」機能を優先させるという日本語の語用論的特徴の習得がL2日本語学習者にとって容易ではないことが背景にあると考えられる。

8. 結論と今後の課題

本研究では、中国語を母語とするL2日本語学習者が不同意行為で使用するヘッジに焦点をあて、中間言語語用論の観点から分析、考察を行った。また日本語から逸脱した場合の原因の一つとして、語用論的転移の可能性を検証した。分析の結果、L2日本語学習者のヘッジには、以下5点の特徴があることが明らかになった。

1. 平均使用数は、TL母語話者に比べやや少ない。
2. TL/L1母語話者と同様に列挙や推測、可能性、思考に関わる言語形式を多用するが、否定疑問はTL/L1母語話者に比べ使用が少ない。
3. TL母語話者と異なり、「命題の不確かさ」を示すヘッジを優先的に使用する。
4. 言語形式の選択には、語用論的転移（正の転移・負の転移）が影響する可能性が高い。
5. 機能の面では、語用論的転移（負の転移）が影響する可能性が高い。

以上をまとめると、不同意遂行時にヘッジを使用することは、L2日本語上級学習者にとって容易ではないものの、部分的にTLの語用論的規範を習得していることが分かった。またTL母語話者との差異が生じる原因の一つとして、L1からの語用論的転移（正の転移・負の転移）の影響があることが示唆された。

ヘッジを適切に使用しながら発話行為を遂行することは、容易ではない。またL2学習者がTL話者と同様にヘッジを使いこなすことは、必ずしも必要ないであろう。しかし、ヘッジに関わる多様性および多機能性を十分に理解し、使用／非用という語用論的選択を行うこと、文脈に応じて適切に使用することは、語用論的能力、さらには円滑なコミュニケーション能力を習得する上で重要である。

今後は、間投詞や中途終了発話文などの使用実態、また目標言語での滞在期間や学習歴など言語使用に与える影響要因についても考察したい。さらに中国語以外の言語を母語とする学習者を対象に追加調査を行い、中間言語としてのヘッジの普遍性と個別性についても併せて考察したいと考える。

参考文献

- 家村伸子 (2003). 「日本語の否定表現の習得過程—中国語話者の発話資料から—」『第二言語としての日本語の習得研究』6: 52-69.
- 井上優・黄麗華 (1996). 「日本語と中国語の真偽疑問文」『国語学』184: 93-106.
- 宇佐美まゆみ (1999). 「『ね』のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」『女性のことば・職場編』東京：ひつじ書房, pp. 241-268.
- 王萌・松村瑞子 (2010). 「中国語における不同意表明の仕方—意見と評価の不同意を中心に—」『言語科学』45: 1-19.
- 大西智之 (1995). 「中国語と日本語の否定疑問文」『中国語学』236: 105-115.
- 岡本真一郎 (2006). 『ことばの社会心理学 第3版』京都：ナカニシヤ出版.
- 根本総子 (2004). 「提案に対する反対の伝え方—親しい友人同士の会話データをもとにして—」『日本語学』23 (10) : 22-33.
- 中島悦子 (1999). 「疑問表現の様相」『女性のことば・職場編』東京：ひつじ書房, pp. 59-82.
- 服部幹雄 (2004). 「日本人英語学習者にみられる「不同意」の応答ストラテジー」『実用英語の地平 篠田義明教授古希記念論文集』東京：南雲堂, pp. 33-42.
- 堀田智子・堀江薫 (2012). 「日本語学習者の「断り」行動におけるヘッジの考察—中間言語語用論分析を通じて—」

『語用論研究』14, 1-19.

- 堀田智子 (2014)「中国人日本語学習者の「不同意」行為—中間言語語用論の観点から—」東北大学大学院博士学位論文.
- 彭国躍 (2012).「中国語モダリティの機能体系—Palmer モデル適用の試み」富谷玲子・堤正典 (編)『神奈川大学言語学研究叢書2 モダリティと言語教育』東京：ひつじ書房, pp. 63-80.
- 柳原光 (2003).『Creative O.D.: 人間のための組織開発シリーズ』東京：行動科学実践研究会 (プレスタイム).
- Brown, P., & Levinson, S.C. (1987). *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge: Cambridge University Press. (田中典子 (監訳) 2011.『ポライトネス 言語使用における、ある普遍現象』東京：研究社).
- Fraser, B. (2010). Pragmatic Competence: The Case of Hedging. In K. Gunther, W. Mihatsch & S. Schneider (Eds.), *New Approaches to Hedging (Studies in Pragmatics)* (pp. 15-34). Bingley: Emerald Group.
- Holtgraves, T. (1997). Yes, but... Positive politeness in conversation arguments. *Journal of Language and Social Psychology*, 16, 222-239.
- Iwasaki, N. (2009). Stating and supporting opinions in an interview: L1 and L2 Japanese speakers. *Foreign Language Annals*, 43 (3), 541-556.
- Locher, M. (2004). *Power and Politeness in Action. Disagreements in Oral Communication*. Berlin, New York: Mouton de Gruyter.
- Pomerantz, A. (1984). Agreeing and disagreeing with assessments: some features of preferred/ dispreferred turn shapes. In J. M. Atkinson & J. Heritage (Eds.), *Structures of Social Action: Studies in Conversation Analysis* (pp.57-101). Cambridge: Cambridge University Press.
- Rees-Miller, J. (2000). Power, Severity, and Context in Disagreement. *Journal of Pragmatics*, 32, 1087-1111.
- Rue Yong-Ju & Zhang Grace Qiao. (2008). Request strategies: a comparative study in Mandarin Chinese and Korean. Amsterdam: John Benjamins.

付記：本研究は、科学研究費助成事業 若手研究 18K12418「日本語学習者のヘッジ表現の習得過程—中間言語語用論の観点からの考察—」、平成27年度東北大学高度教養教育・学生支援機構教育開発推進経費、東北大学大学院国際文化研究科附属言語脳認知総合科学研究センターの助成を受けた研究成果の一部です。

また本稿は、2013年度に東北大学大学院国際文化研究科に提出した博士学位論文 (堀田 2014) の一部、2014年度第17回日本語用論学会および2018年度第20回言語科学会の2大会において口頭発表した内容に加筆・修正したものです。ご指導いただいた東北大学大学院国際文化研究科の吉本啓教授をはじめとする先生方、名古屋大学大学院国際言語文化研究科の堀江薫教授、研究会において貴重なコメントを下さった先生方に感謝の意を表します。

注

- 1 長音化 (例:「ちょっとー」) や、省略化 (例:「かも」、「あんま」、「ない [↑]」)、濁音化した語彙 (例:「ごろ」) などは、同一のものとして扱った。